

Hebrews 5:1-10 Jesus is a new Melchizedek イエスは新しいメルキゼデク

お手元の聖書のヘブル人への手紙 5:1-10 を開いてください。聖書にはたくさんの人物について記されています。その中にはダビデのように、詳細に記されている人物もいます。ダビデ王については、旧約聖書のおよそ66章に渡ってその生涯が記されており、詩篇73篇はダビデ自身が記したものでもありますので、ダビデについて私たちは多くを知っています。一方で、ほとんど言及されない人もいます。先週ヘブル4章の終わりで見たように、筆者はイエスが私たちの大祭司であるという真理を示しました。そして今日のヘブル5章では、イエスがどのようにして私たちの祭司であるかという長い説明を始めています。その主な説明方法の一つは、旧約聖書でわずかに言及されている人物、メルキゼデクとイエスを比較することです。創世記14章では、メルキゼデクについて私たちが知っていることのすべてが記されています。創世記14:18:20「また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。」メルキゼデクに関する記述は短いですが、今日ヘブル5章で見られるように、イエスがどのような方かを理解する上で非常に重要です。ここまで、イエスと他の何かとの対比が繰り返し示されてきました。ヘブル1:1-2では、イエスと預言者たちを対比させ「神は昔、預言者たちによって、(中略)先祖たちに語られましたが、2 この終わりの時には、御子にあって私たちに語られました。」とありました。「語られました『が』」とあるのは、御子であるイエスの方が優れていることを示しています。ヘブル1:3-4では、み使いと対比させて「御子は罪のきよめを成し遂げ、いと高き所で、大いなる方の右の座に着かれました。4 御子が受け継いだ御名は、御使いたちの名よりもすばらしく、それだけ御使いよりもすぐれた方となりました。」とあります。イエスはみ使いよりも優れておられます。ヘブル3:3はモーセと比較しています。「家よりも、家を建てる人が大いなる栄誉を持つと同じように、イエスはモーセよりも大いなる栄光を受けるにふさわしいとされました。」イエスはモーセよりも優れた方で、より大いなる栄光を受けるにふさわしい方です。けれど、メルキゼデクによってその流れが変わります。イエスはメルキゼデクと比較してそれより優れた方とされたのではなく、メルキゼデクのような方だとされたのです。今日、私たちはイエスが真の大祭司であること、イスラエルの最初の大祭司であったアロンのような大祭司ではなく、メルキゼデクのような方であったことを見ます。その意味するところは、罪がなく、気高く、完全な救いをもたらすことのできる唯一の永遠なる祭司であるということです。

ヘブル5章の最初の3節を読むことから始めましょう。「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。2 大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているのです、無知で迷っている人々に優しく接することができます。3 また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」この章ではまず、イスラエルの神の民にとっての大祭司の役割について語ることから始まります。ですが、そこにあるのは決して十分とは言えない大祭司の姿です。ここでは再び、そもそもなぜ祭司が必要なのかが記されています。私たち人間は罪により神から離れた状態です。私たちは自分の力で神の御前に出ることができないため、私たちの代わりに神の御前に出ることができる方、つまり仲介者のような存在が必要です。旧約聖書において、その役割を担う者として選ばれたのは祭司たち、特に大祭司たちでした。大祭司は、神の御前に出るために必要な聖さと罪のなさを示すため、非常に厳格な儀式を守ったのち、罪の代価は死であるという人間の罪の深刻さを示すために、血のいけにえを献げました。人間の祭司がいることの良い点は、罪を赦してくださる聖い神に対して、自分に代わっていけにえを献げてくれる祭司に罪を告白するのですが、その祭司もまた人間だと分かっていることです。同じ人間として、日々目に見える形で神の御前に聖くあることが求められる祭司たちは、他の人たち以上に自分たちの罪深さを痛感していたことなのでしょう。レビ記9章で、大祭司が個人的に罪のためのいけにえを献げる役割を果たすとは、何を意味していたかの一端を見ること

ができます。レビ記9:7「7 モーセはアロンに言った。「祭壇に近づきなさい。あなたの罪のきよめのささげ物と全焼のささげ物を献げ、あなた自身のため、またこの民のために宥めを行いなさい。また民のささげ物を献げ、主が命じられたとおりに彼らのために宥めを行いなさい。」」つまり、会衆の罪の告白の前に、大祭司は個人的に罪を告白し、ささげ物を献げることが求められていました。ヘブル人への手紙の著者は、ここ3節においても「また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」と述べています。日々、会衆の罪の告白の前に自分の罪の告白をしたり、個人の罪の告白と他者のためにささげ物を献げる務めがあるとしたら、自分の罪深さは常に思いの中心にあることでしょう。自分の罪深さや、神に近づく資格のなさを自覚している司祭は、罪を犯した人たちに対して共感を持って優しく接することでしょう。ここで、これらの聖句がどのような罪について語っているのかを確認しておくことは重要です。それは「無知で迷っている人々」と記されています。意図的に罪を犯し続ける者に、同情や憐れみを示し、彼らのためにささげ物を献げるということではありません。知らなかったために自覚なく行っていたことが、実は罪であったことに気づいた、真に神に従う者のことを指しています。あるいは、罪を犯したものの、それがその人の向かっている方向とは違っている人のことです。そのような人達は、道に迷い、義の道から外れてしまいましたが、願っていること、意図していることは神を喜ばせることです。イエスに従う私たち皆が、まさにこのような存在なのです。私たちは真に救われていて、イエス・キリストによって贖われています。もし私たちがイエスに従っているのであれば、それはイエスを私たちの主であり救い主として従うのであり、その御言葉に従いたいと願っているからですが、私たちは自分の弱さや無知ゆえにしばしば道を誤ってしまいます。ですからそこに、大祭司の人間性が意味を持っています。だからこそ、イエスが人となられたことが重要なのです。ヘブル人への手紙の著者は、ヘブル2章でイエスの人間性について示すところから、いかに慎重にその論理を展開してきたのかを見ることが出来ます。イエスが人となったことについてヘブル2:17でこう述べています。「したがって、神に関わる事柄について、あわれみ深い、忠実な大祭司となるために、イエスはすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりません。それで民の罪の宥めがなされたのです。」ですから、私たちはマタイ11:28-30で「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」と語られた、大祭司であるイエスに目を向けます。これが、私たちが知らずに罪を犯したり、迷った子どものように神の道から逸れてしまっても、優しく接してくださる大祭司です。イエスは罪に対する弱さを知っておられませんでした。誘惑、疲労、悲しみ、重圧に対する弱さはご存じでした。そして「私のもとに来なさい。赦しを与え、創造主へ至る道を開いてくださる優しい大祭司に出会えるでしょう。」とおっしゃいます。

ですが、イエスはアロンやその後の大祭司とは異なります。それは、人の弱さを経験しつつも、ご自分の罪により弱さを身にまもってはおられなかったからです。ですからヘブル人への手紙の著者は、罪に繰り返し囚われ、それゆえに絶えずその罪のためのささげ物を必要とするのではない、別の類の祭司に私たちが目を向けることを願ったのです。その祭司とは完全に人でありながら罪による弱さのないイエスです。そのイエスの姿は大祭司としてのアロンではなく、王でもあった祭司、メルキゼデクです。彼について記された4-6節を読みましょう。「4 また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。5 同様にキリストも、大祭司となる栄誉を自分で得たのではなく、「あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ」と語りかけた方が、それをお与えになったのです。6 別の箇所でも、「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である」と言っておられるとおりです。」イエス・キリストが私たちの大祭司であるということについて話していたことを思い出してください。ですが、この3節の中には2か所の詩篇からの引用があり、イエスが出エジプト記で祭司に任命されたアロンの子孫たちとは全く異なる大祭司であることを示しています。イエスはアロンの例に倣ったのではなく、メルキゼデクの例に倣っていると記されています。すでに創

世記においてメルキゼデクが唯一無二の存在であったことを指摘しました。最初に読んだ、メルキゼデクを紹介している創世記の箇所は、甥のロトが住む町を襲った4人の王からロトを救い出すため、アブラハムが家来の中から選んだ318人の訓練されたしもべを連れて出た後のことでした。ここでそれを読む時間はありませんが、そのことは創世記14章に記されています。その後アブラハムは、その戦いで得たものの10分の1を神へのささげ物としてメルキゼデクに与えました。メルキゼデクはシャレムの王であり、神の祭司であったと記されています。神はこの小さな出来事のみ言葉の中に永遠に残すことを望まれたようです。それは、私たちの大祭司としてキリストが成してくださったメシアとしての働きを示すことでキリストを指し示すためです。事実、このほかにメルキゼデクについて述べられているのは、聖書全体において詩篇110:4のみで、その句がヘブル人への手紙で6節が引用している部分です。詩篇110篇は明らかにメシア詩篇であり、イエスがみ使いたちよりも優れていることを示すために、ヘブル人への手紙1:13で既に一度引用されています。メルキゼデクが聖書に登場する目的はイエスを指し示すためであったと思われると始めからお伝えしている理由は、彼に関する二つの記述がその役割を果たしており、彼が明らかに人間であるように見えるものの、彼を否定的に捉える要素が何一つないからです。この、知られている罪が何もないという事実は、単に祭司というだけでなく、人間の罪とは無縁な祭司であるキリストとの明確な関係性を示しています。メルキゼデクは旧約聖書においてイエスご自身の現れであるかも知れないとする人々もいますし、私自身過去にはそのように考えていたと思います。ですが、その説明のされ方から判断するに、主のみ使いがイエス自身であったと明確に示されていると思われる記述とは異なるように思えます。

このメルキゼデクについての説明が違っている主な点は、祭司という立場に加えてもう一つの肩書があるということです。それはイエスを祭司であると同時に王であるとしている点です。そのことを、ここで引用されている旧約聖書の二つの箇所に見ることができます。一つ目は既にみたようにイエスをメルキゼデクと同一視している箇所です。イエスは祭司であり王と呼ばれていて、メルキゼデクと同じだと認識されています。2つ目の箇所はイエスが王と見なされている最初の詩篇の箇所、詩篇2:7「あなたはわたしの子。わたしが今日あなたを生んだ。」という箇所です。旧約聖書、特に詩篇から引用されている場合、ユダヤ人にとってはその箇所全体が思い浮かべられていたことを覚えておかななくてはなりません。また詩篇2篇では、御子が祭司であることではなく、王であることに焦点が当てられています。そのことを先ほどの詩篇の箇所の前、詩篇2:6に見ることができます。そこには「わたしがわたしの王を立てたのだ。わたしの聖なる山シオンに。」とあります。これらの記述は、4-5節にある「栄誉」という言葉と共に、イエスが聖書の中でメルキゼデクと同じく祭司であり王であるということを示しています。ですが、イエスはこの栄誉を自ら得たものではありません。神の救いの御業のあらゆる部分と同じく、5節ではイエスがこの祭司であり王であると言う役割が神によって与えられたと記されています。イエスは、神の永遠の救いの計画に従って、父なる神によってその役割を与えられたのです。永遠の御子として、イエスは進んで父なる神の御心に従い、肉体をもって人となられ、ご自分に定められた祭司としての務めを完全に全うされました。そして今、父なる神によって王として立てられました。

ですが、ここで注目すべきはイエスの祭司としての立場はとこしえであるということです。「あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である」この祭司はアロンの系譜に連なる祭司らとは異なり、人の生涯という枠に制限されることはありませんでした。イエスは永遠の務めのために完全に備えられた大祭司となられたのです。7-10節を見てください。「7 キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。8 キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、9 完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり、10 メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。」次に、何がイエスを完全かつ永遠の大祭司とするのかについて見ていきましょう。この箇所からも分かるように、イエスを祭司たらしめているのは、その苦しみで

あり、死はその苦しみの結果であると考えられます。その苦しみは十字架だけでなく、父なる神の御心に従うことがもたらすことを知っているゆえの苦しみでもありました。それはイエスの生涯すべてについて、より大きな視点でとらえているかもしれませんが、イエスが死を前にゲッセマネの園で味わった苦悩をはっきりと見て取ることができます。マタイの福音書26:37-39では、イエスの園での様子が記されています。「そして、ペテロとゼベダイの子二人と一緒に連れて行かれたが、イエスは悲しみもだえ始められた。38 そのとき、イエスは彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、わたしと一緒に目を覚ましていなさい。」39 それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」この悲しみは、十字架においてこの世の罪を負うことによる悲しみでした。また、この悲しみがイエスの従順にも関係していることに注目してください。「わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」これは8節にみられるのと同じことです。「**キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び**」イエスを従順な方と考えるのは奇妙に思えるかもしれませんが、完全に人でありながら罪がないということは、神の御心に従う人間としての意思が存在するということです。ですから、神の御子が父なる神と御心が完全に一つである一方で、御子は人となり、人としてその意志を神に服従させ捧げたのです。このため、イエスは父なる神や聖霊なる神と違って、完全に従順な人として、私たちの罪のため死なれ、私たちの完全な大祭司として、ご自分を神に捧げることができる方です。ですから、その苦しみと死によって、私たちの大祭司となられたのです。ですが、私たちの大祭司として仕えてくださる方は死なれた救い主ではなく、復活された救い主です。その完全さは死だけによってもたらされたのではなく、墓からよみがえられたことによってもたらされました。神は死んだ者を私たちの救い主とされたのではなく、み言葉に見る限り、まさに生きているメルキゼデクのような方を救い主とされたのです。これは、大祭司が常に私たちのために父なる神の元に進み出てくださるため、私たちの救いは確固たるもので永遠に続くことを意味します。人生に何が起ころうとも、私たちの永遠の救いは、永遠の大祭司の御業ゆえに確実です。ですが、地において私たちの大祭司であられるキリストが、父なる神に従順であるために苦しみを受けられたのであれば、キリストの似姿になるよう召された私たちが、それとは異なることを期待できるはずがありません。従順であることは、苦しみをもたらすことがありますし、多くの場合実際に苦しみをもたらします。犠牲と執り成しによって救いをもたらしてくださる、大祭司としてのイエスがおられるということは、王としてのイエスに従うことも意味します。そしてそれは、より楽な人生への道を選ぶのではなく、キリストを大祭司とし、私たちをキリストの死と復活によってもたらされる恵みの受け手としてくださった方に栄光を帰す素晴らしい人生への道です。この聖餐式において私たちが覚えるのは、まさにその死についてです。罪を悔い改め、キリストに信頼し、洗礼を受けたキリストに従う方であれば、共に聖餐式に与ってください。YIBCの教会員でない方のご参加も歓迎いたしますが、聖餐式は私たちが教会員として参加するキリストの体と私たち一人一人をつなぐものです。お子さんがおられる方は、この聖餐式の重要性を子どもたちに示す最善の方法は、まだ準備ができていないお子さんを主の晩餐に与らせないことです。私が祈った後、執事が礼拝堂の四隅でパンとジュースをお配りします。その後、皆で共に聖餐式に与りましょう。祈ります。

Hebrews 5:1-10 Jesus is a new Melchizedek イエスは、メルキゼデクの位にある、はるかにすぐれた大祭司

Turn in your Bibles today to Hebrews 5:1-10. The Bible contains a lot of characters. Some of these we see in detail like David. King David has about 66 chapters of the Old Testament covering his life, and he wrote 73 of the Psalms, so we know a lot about David. Other characters barely get a mention. As we saw last week in the end of Hebrews 4, the writer has introduced us to the idea that Jesus is our High Priest, and our passage today in Hebrews 5 really begins a long section explaining how Jesus is our Priest. One of the primary ways he does that is comparing Jesus with one of those briefly mentioned characters in the Old Testament, Melchizedek. Genesis 14 gives us everything we know about Melchizedek. [Genesis 14:18-20](#) says, ¹⁸ And Melchizedek king of Salem brought out bread and wine. (He was priest of God Most High.) ¹⁹ And he blessed him and said, “Blessed be Abram by God Most High, Possessor^[a] of heaven and earth; ²⁰ and blessed be God Most High, who has delivered your enemies into your hand!” [And Abram gave him a tenth of everything.](#) The description of Melchizedek, although brief, becomes very important to our understanding of who Jesus is as we will see in our passage today here in Hebrews 5. Now up until this point, we have seen a series of contrasts being made between Jesus and something else. [Hebrews 1:1-2](#) draws a contrast between prophets and Jesus. […God spoke to our fathers by the prophets,² but in these last days he has spoken to us by his Son…](#) That word but shows a contrast that the Son, Jesus, is better. [Hebrews 1:3-4](#) shows a contrast with angels [… After making purification for sins, he sat down at the right hand of the Majesty on high, ⁴having become as much superior to angels as the name he has inherited is more excellent than theirs.](#) Jesus is superior to angels. [Hebrews 3:3](#) shows a contrast with Moses. [³For Jesus has been counted worthy of more glory than Moses—as much more glory as the builder of a house has more honor than the house itself.](#) Jesus is better, worthy of more glory than Moses. But the pattern changes with Melchizedek. Jesus is not being compared to Melchizedek and said to be better, but instead he is said to be like Melchizedek. Today we will see that Jesus is the true High Priest— not like Aaron, who was the first High Priest in Israel, but like Melchizedek: a sinless, royal, and eternal priest who alone brings complete salvation.

Let’s begin reading Hebrews 5 with the first 3 verses. [5 For every high priest chosen from among men is appointed to act on behalf of men in relation to God, to offer gifts and sacrifices for sins. 2 He can deal gently with the ignorant and wayward, since he himself is beset with weakness. 3 Because of this he is obligated to offer sacrifice for his own sins just as he does for those of the people.](#) This chapter starts off by talking about the high priest’s role for God’s people in Israel. But what we see in this description is **a high priest who could never be good enough**. Once again, we see the need for a priest in the first place. We as humans are separated from God by sin. We cannot just enter into God’s presence on our own merits so we need a go-between, something like a mediator, to go to God on our behalf. In the Old Testament, the priests and especially the High Priests were the ones chosen for that role. The high priest followed very specific rituals to demonstrate the need for holiness, sinlessness to enter God’s presence and then would offer blood sacrifices to show the seriousness of human sin that deserved death to pay for that sin. One of the benefits of having a human priest is that while you are essentially confessing sin to that priest who will offer a sacrifice on your behalf to a holy God who will forgive that sin, there is comfort in knowing that that priest is human as well. As a fellow human who on a daily basis is directly accountable in

a visible way for their holiness before God, the priests would have been more aware than others of their sinfulness. In Leviticus 9 we see part of what it meant for the high priest personally to carry out their role of offering sacrifices for sin. [Leviticus 9:7](#) says, [7 Then Moses said to Aaron, “Draw near to the altar and offer your sin offering and your burnt offering and make atonement for yourself and for the people, and bring the offering of the people and make atonement for them, as the Lord has commanded.”](#) So, before corporate confessions of sin, the priest was High Priest was expected to make personal confession and sacrifice for sin. The writer of Hebrews notes that even here in verse 3, [he is obligated to offer sacrifice for his own sins just as he does for those of the people](#). If each day, your duties involved personal confession before making corporate or personal confession of sin and sacrifice on behalf of others, then your own sinfulness would be always at the forefront of your thoughts. The priest, aware of their own sinfulness and unworthiness of approaching God, would be sympathetic and gentle to those who had sinned.

It is noteworthy to point out here what type of sin, these verses refer to. It is [with the ignorant and wayward](#). This isn't providing sympathy and grace and offering sacrifices for those who are determined to continue in their sin. This is a person who is a true follower of God who comes to realize that something they are doing in ignorance without knowledge is in fact sin. Or the person who sins, but that is not the direction of their life. They are wayward, they have gone off the path of righteousness, but their desire and intent is to please God. This is how all of us who follow Jesus really are. We are truly saved, atonement has been made on our behalf by Jesus Christ. If we are following him then we are following him as our Lord and Savior and want to obey him, but we often are wayward, out of weakness or ignorance. This is where the humanity of the High Priest means something. And so it matters that Jesus became human. You can see how the writer of Hebrews has carefully arranged his arguments going back to Hebrews 2 with Jesus's humanity. He even says about Jesus being human in [Hebrews 2:17](#), [Therefore he had to be made like his brothers in every respect, so that he might become a merciful and faithful high priest in the service of God, to make propitiation for the sins of the people](#). So we turn to Jesus as our High Priest who tells us in [Matthew 11:28-30](#), [28 Come to me, all who labor and are heavy laden, and I will give you rest. 29 Take my yoke upon you, and learn from me, for I am gentle and lowly in heart, and you will find rest for your souls. 30 For my yoke is easy, and my burden is light.](#) This is our High Priest who deals gently with us even though we sin in ignorance and because we choose to stray from his path as a wayward child. Jesus has never known the weakness of sin, but he has known the weakness of temptation, exhaustion, sorrow, pressure that regular life in this world brings. And he says come to me and you will find a gentle High Priest who offers forgiveness and access to our Creator

But Jesus is not just like Aaron and the human high priests after him, because while experiencing human weakness, he was never [beset with the weakness](#) of his own sin. This is why the writer of Hebrews wants us to see a different kind of priest, one who is not trapped in the cycle of sin and necessary ongoing sacrifice for that sin. That priest is Jesus, fully human, but without that weakness of sin. And the picture of Jesus is not Aaron as the High Priest, but the priest Melchizedek, [A Priest who is also appointed as King](#). Let's read verses 4-6 where he is introduced. [4 And no one takes this honor for himself, but only when called by God, just as Aaron was. 5 So also Christ did not exalt himself to be made a high priest, but was appointed by him who said to him, “You are](#)

my Son, today I have begotten you”; 6 as he says also in another place, “You are a priest forever, after the order of Melchizedek.” Remember we are talking about Jesus Christ being our high priest. But in these three verses there are two quotations from Psalms that are pointing to the fact that Jesus is a very different high priest that those who descend from Aaron appointed in Exodus. He is instead said to be in the order of Melchizedek, not Aaron. We already pointed out in Genesis that Melchizedek was unique. That passage we read in Genesis at the beginning that introduced Melchizedek happened after Abraham had led an army made up of 318 of his trained servants in his household to rescue his nephew Lot from 4 kings who had raided the city that Lot lived in. We don’t have time to read it, but that event is found in Genesis 14. After that, Abraham tithed or paid 10 percent of the treasure he captured from that event to Melchizedek as an offering to God. Melchizedek is described as a King of Salem and priest of God. It seems like God wanted this very small event to be included for eternity in Scripture simply to point to Christ, in a way that would show his Messianic work as our High Priest. In fact the only other time he is mentioned in the entire Bible is in Psalm 110:4 which the writer of Hebrews quotes in verse 6. Psalm 110 is a clearly Messianic Psalm that has already been quoted once in Hebrews 1:13 in order to show that Jesus is better than angels. The reason I say that from the very beginning, it seems that Melchizedek is in the Bible specifically to point to Jesus is that both mentions of him are doing that and although he seems clearly human, there is nothing that can put him in a negative light. This absence of any known sin can give a clear connection to Christ as not only a priest, but a priest separate from human sin. There are some, and I think in the past myself as well, who have considered that Melchizedek may be an Old Testament appearance of Jesus himself. But the way he is spoken of doesn’t seem to be the same as the angel of the Lord references that seem clearer to be Jesus himself.

The primary point of difference that this reference to Melchizedek is pointing to is an additional identity in addition to priest. It is identifying Jesus as being a priest, but also a king. We see this in the two Old Testament passages quoted here. The first is in the reference to Jesus being identified with Melchizedek as we have already pointed out. He is called both priest and king, so Jesus is being identified in the same way as Melchizedek. The second way that we see Jesus identified as king is in the first Psalm quote from **Psalm 2:7**. “You are my Son, today I have begotten you.” We have to remember that when a quote is made from the Old Testament particularly Psalms, for a Jewish audience the entire passage would be in mind. And in Psalm 2, the focus is on the Son being a king, not a priest. We see that when we drop back one verse in that Psalm to **Psalm 2:6**, “As for me, I have set my King on Zion, my holy hill.” These references along with “exalting” and “honoring” in verses 4-5 point to Jesus being a priest-king just like Melchizedek is identified in the Bible. But Jesus did not take this honor on himself. Just like every part of God’s work in salvation, verse 5 says he was **appointed** by God to this role of priest-king. Jesus was appointed by the Father, in accordance with God’s eternal plan of salvation. As the eternal Son, he willingly submitted to the Father’s will, and in his incarnate humanity, he perfectly obeyed and fulfilled the priestly role appointed to him, and now is exalted by God the Father as king.

But the focus here has turned to the “forever” nature of Jesus’s priesthood. “You are a priest forever, after the order of Melchizedek.” This priest unlike the Aaronic priests was not limited by the space of a human life. **Jesus has become a High Priest perfected for an eternal office.** Look at verses 7-10. **7 In the days of his flesh, Jesus offered up**

prayers and supplications, with loud cries and tears, to him who was able to save him from death, and he was heard because of his reverence. **8** Although he was a son, he learned obedience through what he suffered.**9** And being made perfect, he became the source of eternal salvation to all who obey him, **10** being designated by God a high priest after the order of Melchizedek. Now we get to what makes Jesus the perfect and eternal High Priest. And as we can see in this passage what leads to Jesus as priest is his suffering, and we can assume his death as a result of his suffering. But it wasn't just the cross, it was the suffering from the knowledge of what his obedience to God the Father's will would bring. While it may have a broader context to Jesus's full life, we see this anguish that Jesus suffered clearly in the garden of Gethsemane before his death. **Matthew 26:37-39** talks about Jesus in the garden. **37** And taking with him Peter and the two sons of Zebedee, he began to be sorrowful and troubled. **38** Then he said to them, "My soul is very sorrowful, even to death; remain here, and watch with me." **39** And going a little farther he fell on his face and prayed, saying, "My Father, if it be possible, let this cup pass from me; nevertheless, not as I will, but as you will." This sorrow was over the weight of bearing the sin of the world on the cross. But notice that this sorrow is also connected to Jesus's obedience. "Not as I will but as you will." This is the same thing we see in verse 8. **Although he was a son, he learned obedience through what he suffered.** It seems strange to think of Jesus as obedient, but remember to be fully human and sinless means that there has to be a human will that is obedient to God's will. So while the Son of God is fully of one will with God the Father, the Son became human and as a human submitted his human will in obedience to God. This makes him different than God the Father or God the Holy Spirit, in that as a fully obedient human, who died for our sin, he can offer his own sacrifice to God as our perfect High Priest. So by his suffering and death, he became our perfect High Priest. But it is not a dead Savior who serves as our High Priest, it is a risen Savior. His perfection came not by death alone, but by rising from the grave. God did not designate a dead man to be our Savior, but one like Melchizedek who when we see him in Scripture is very much alive. This means that our salvation is secure and permanent since the High Priest is constantly going before God the Father on our behalf. No matter what comes in life, our **eternal salvation** is secure because of the work of our eternal High Priest. But on earth if Christ our High Priest suffered to be obedient to the Father, then how can we who are called to be like Christ expect anything different. Obedience can and often will bring suffering. To have Jesus as the High Priest whose sacrifice and mediation to God brings salvation means to follow Jesus as king. And this is not to follow a path to an easier life, but to a glorious life that brings glory to the one who appointed Christ as High Priest and us to be recipients of his grace that comes through his death and resurrection. That death is what we remember in this communion meal. I invite you to join us in this meal today if you are follower of Christ who has repented of sin and trusted Christ, and then been obedient in being baptized. While we welcome those who are not members of YIBC to participate, this meal connects us with the local Body of Christ where we should be participating as members. For parents, the best way to show children the importance of this meal is to not allow them to participate when they are not ready. After I pray the Deacons will distribute the bread and cup from the 4 corners of the sanctuary and then we will eat and drink the bread and cup together. Let's pray.